

古典文学と松

浜口俊裕

はじめに

「松」はマツ科マツ属の針葉樹で、赤松や黒松などを総称した樹木をいう。古代から千年の長命を保つと言われ、赤松や黒松が二針、五葉松が五針の葉を束生する。山野のみならず、木々が生育しにくい険しい崖や岩場、砂地のような痩せた土地、寄せ来る波や潮風を伴う海辺などにも成育する生命力の強い樹木である。植生的には、山地に赤松、海辺に黒松が多い。四季を通じて緑葉の色が変わらず、厳冬の霜雪にも端正な姿を見せる性状から、防風林、防砂林、社寺林、街路樹、庭園樹、盆栽などに見られ、現代人に馴染み深い樹木だが、古代の人々にも身近な立木であった。たとえば、防人に出征した時の『万葉集』（巻二十、四七）「松の木の並みたる見れば家人の我を見送ると立たりしもころ」は、行路の松並木が立

ち並ぶ姿に家族との別れ際の光景を連想して、郷里へ思いを募らせたのである。このように松は古代の人々の生活や人生にも関わりが深かった。そこで本稿では、古典文学において松をどのようなものと捉えて受容したか概観してみることにする。

なお、引用文について、特に断わらない限り、広く通行する『新編日本古典文学全集』（小学）、『新編国歌大観』（角川）、『新釈漢文大系』（明徳）、書目に*付記の『日本古典文学大系』（岩波）に拠った書目は、本稿巻末での注記を割愛したほか、私に句読点などの表記を改めた所もある。

一 千代松の木、千代木

『万葉集』には松を詠む歌が七九首（「松風」三首含む）あり、松の長寿を「千年」と表す歌が一首（四二六六番）、「千

代」と表す歌が二首（二二八・九九〇番）ある。「千代」は千年に相当する時間を表し、次に挙げる歌は、松を「千代松の木」と称した稀少な一首である。

茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の木の歳の知らなく

（卷六、雑歌、九九〇）
紀朝臣贈人

「茂岡」の地で緑豊かに「茂」り「栄えたる」松の変らぬ繁栄を歌い、齢を重ねた風姿を「神さび」と人格化し、長寿の「松」に「待つ」意を掛けて千年の長命を待ち受ける「千代松の木」が、幾年経たかも知りたいことを「歳の知らなく」句で括り、片岡に立つ松樹の神聖と繁栄と長命を寿いだ讚歌であり、「夫木和歌抄」（卷二十七、雑部三、岡九にも入集する）

室町時代前期には松を「千代木」とも言った。陸奥国に赴任した藤原実方が樵夫姿の老翁（正体は塩竈大明神）に「阿古屋松」の在処を問うと、老翁はその松を「千代木」と称して松のめでたさを語る謡曲が世阿弥（三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三五十、三五一、三五二、三五三、三五四、三五五、三五六、三五七、三五八、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七一、三七二、三七三、三七四、三七五、三七六、三七七、三七八、三七九、三八〇、三八一、三八二、三八三、三八四、三八五、三八六、三八七、三八八、三八九、三九〇、三九一、三九二、三九三、三九四、三九五、三九六、三九七、三九八、三九九、四〇〇）の「阿古屋松」に、千代木の枝の万経て柳にかへる緑もあり（謡曲集上）（屋阿古）とある。この「千代木」を同時代の永享十年（三四）以前に成立の『秘蔵抄』（『古今打聞』とも）（下六、六）には、次の証歌を引いて松の異名と言っている。

君がへんやほよろづ代のためしかな千世木の枝につるす
くふなり 貫之

千代木とは松を云ふなり、松は千年ふるといふに付
けて千代木と云ふなり（一）

二 松は貞節の象徴

松が厳寒に緑の色を変えないさまを『論語』（卷五、子罕第九、三三三）に「子曰、歳寒、然後知松栢之後彫也。〈子曰く、歳寒くして、然る後に松栢の彫むに後るるを知る。〉」と語って以来、これを「莊子」（雜篇、養生主、二）「荀子」（卷十九、大略、二）「淮南子」（卷二、俶真訓、一）「礼記」（卷十、禮器、一）「文選」（卷二十三、後漢紀、一）「宋書」（卷八十二、顧悦之、一）などに、松の貞節を表象する言説として受容された。

わが国で右の「論語」の言説を最初に受容したのは、天平勝宝三年（七五）成立の『懐風藻』八九、藤原宇合が倭判官に贈った詩序「在常陸贈倭判官留在京」に言う、

歳寒後驗松竹之貞（歳寒くして後に松竹の貞を驗る）

の句であろう。才知と德行に優れた有能な倭判官が知遇を得ずにいたのを、厳寒の艱難に耐える松竹に擬えて「松竹之貞」と表したのである。

松の貞節の固さは、和歌にも次のように受容された。

雪降りて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見え
けれ
雪降りて年の暮れ行く時にこそ遂に緑の松も見えけれ
（『古今集』（卷六、冬歌、三四）
○歌人しらず）

世の中に久しきものは雪のうちにもと色かへぬ松にざり
ける（二）
（『新撰万葉集』（冬歌、八七七））

前者二首は寛平五年（八九）九月以前、宇多天皇母后班子女王
（『貫之集』（九七））

邸での寛平御時后宮歌合の披講歌。後者「世の中に」は、延長七年^{九二〇}十月十四日の陽成院第一皇子元良親王四十算賀に、親王妃の醍醐天皇第八女修子内親王が紀實之に詠ませた屏風歌。いずれも『論語』に拠り、歳晩に緑色を保つ松の志を曲げない節操の固さを雪と取り合わせた趣向である。

因みに松の貞節と雪の配合は、わが国の漢詩にも少なくない。例えば、『類聚句題抄』^{三三}には、「歳寒知松貞」を句題にした源順^{九二二}の七言詩がある。

難凋^①朔^②迎冬茂、易落^③楓^④慙^⑤送^⑥歳森。十八公^⑦榮霜後顯、一千年^⑧色雪中深。
〈凋み難き柏は伴ひて冬を迎へて茂り、落ち易き楓は慙ぢて歳を送る森。十八公の榮は霜の後に顯はれ、一千年の色は雪の中に深し。〉

句題の「歳寒」と「松貞」は、『論語』以来の類型的な取り合わせに拠るが、『論語』での包括的な「歳寒」を「霜」「雪」で具象化し、各々「十八公榮」と「一千年色」、「霜後」と「雪中」、「顯」と「深」を対比した「十八公榮霜後顯」「一千年色雪中深」の二句を対句で構成し、千年も雪中で緑色が変わらない節操の固さを「松貞」と讃えたのである。この対句の佳句は、『和漢朗詠集』^{卷下、松}や謡曲「阿古屋松」にも撰取される。

三 孤松の貞節

松の貞節を孤松に見出した中臣朝臣大島の律詩が『懷風藻』^{詠松二}にある。

隴上孤松翠、凌雲心本明。

^{隴上、みどり}隴上孤松翠にして、凌雲の心本より明らけし。

餘根堅厚地、貞質指高天。

餘根厚地に堅く、貞質高天を指す。

弱枝異萇草、茂葉同桂榮。

弱き枝は萇草に異にして、茂き葉は桂榮に同じ。

孫楚高貞節、隱居悅笠輕。

孫楚貞節を高くし、隱居笠の輕きことを悦ぶ。

『論語』を間接的に受容した詩序で、首聯で丘の上の一本松が常緑を保ち、雲をも押し退けんばかりである気概を語り、頷聯で支根を深く大地に廻らし、おのれ独り高い空を指す高潔な様相に節操の固い「貞質」を詠う。続く頸聯と尾聯でも、常緑の桂樹や晋の孫楚の貞節の高さを引き合いに出して、「孤松」の「貞節」の高さを再提示している。

そもそも、詩題及び第一句に言う「孤松」は、言うまでもなく、ただ一本だけしか生長していない松である。近くに仲間の種類がなく、生涯のあらゆる苦難を一身に負うこととなるのが「孤松」で、順境のうちに生長する松とは対照的な境遇にある。それでも不変の緑色を呈して果敢に大空に向って

聳える「孤松」の、のびやかにして力強い姿に、節操の正しい「貞質」を取ったのである。

なお、孤松の環境が順境と言ひ難いことは、『＊文華秀麗集』

巻下、雜賦「二二」、仲雄王「奉和代贈古松偈歌」の「孤松盤屈薜蘿枝、貞節苦寒霜雪知。〈孤

松盤屈す薜蘿の枝、貞節を苦寒の霜雪に知る。〉からも窺知される。長年風雪にさらされて幹や枝が屈曲し、まさみかみから枉まが鬘かみや

薦鬘つたかすらなどの薜蘿も絡みつくさまは、孤松にとつて順境ではない。こうした過酷な環境にありながら、霜雪にも緑色を

変えない孤松の「貞節」さに、作者は共感のまなざしを向けたのである。また和文ではたとえば、『源平盛衰記』

下巻、供養寺二十八、経「正竹生高節仙童偈事」に「奇あやしき石そはだち峙こして孤松こしやう一株ちゆうあり」と言うのも、

順境の地勢と対照的な険峻な岩場の孤松に光を当てた叙述と言えよう。

四 松の異称「貞木」

厳冬にも葉の緑色を変えず鮮やかに茂る松は、その性状から貞節を固く守る樹木に喩えて「貞木」と異称された。南朝宋の正史『宋書』卷八十二、列伝第「四十一、顧暉之伝」に、「貞木」の言説が見られる。

爾乃松柳異質、薺荼殊性。故疾風知勁草、嚴霜識貞木、

何異忠孝之質。〈爾に乃ち松柳は質を異にし、薺せい荼とは性を殊にす。故に疾風に勁草を知り、嚴霜に貞木を識る

は、何ぞ忠孝の質に異ならん。〉

とある「嚴霜識貞木」がそれである。「故疾風知勁草」は、范曄撰『後漢書』卷三十七、魏郡王霸伝の、

光武謂霸曰、潁川從我者皆逝、而子獨留。努力、疾風知

勁草。〈光武霸に謂ひて曰く、潁川えいせんの我に従ひし者皆逝

りぬ、而して子獨り留まれり。努力せよ、疾風勁草を知れり。〉

に抛り、後漢の光武帝が最後まで忠義を尽した功臣の王霸

に、激しい風にも屈しない草が見分けられるのを喩えにして

從臣の節操を語つたもの。『宋書』の「嚴霜識貞木」も前掲の「論語」に依り、厳冬に緑葉不変な松の節操の固さを「貞木」と認識しての言説である。

わが国でも古墳時代に松を「貞木」と称したことが、『聖徳太子伝暦』上巻に引く敏達天皇三年「四五七」三月三日条に記されて

いる。

桃花之旦、皇子與妃率將太子遊於後園。太子在抱近於皇

子。皇子問曰。吾兒何謂。桃花爲樂。松葉爲賞。太子答

云。松葉爲賞。皇子問之。何以。太子答之。桃花一旦榮物、

松葉百年之貞木也。故可賞之。〈桃花の旦あした、皇子と妃と將太子を率ゐて後園に遊びたまふ。太子抱かれ在りて皇子に近し。皇子問ひて曰く。吾が兒何謂ふ。桃花を樂

はむとや爲る。松葉をや賞ばむと爲る。太子答へして云

ひたまふ。松葉を賞ばむと爲ふ。皇子之を問ひたまふ。何の以ぞ。太子之に答へしたまふ。桃花は一旦さかへものの榮物

にして、松葉は百年の貞木なり。故に之を賞すべしと。)

(傍線稿者)

右とほぼ同文が『扶桑略記』敏達天皇三年三月三日条にも見られる。

豊日皇子、與妃率將耳聰王子、遊於後園。問曰。吾兒何謂。桃花爲樂。松葉爲賞。王子答云。松葉爲賞。桃花一旦之榮物、松葉百年之貞木也。〔豊日皇子、妃と將耳聰王子を率ゐて、後園に遊びたまふ。問ひて曰く。吾が兒何謂ふ。桃花を樂はむとや爲る。松葉を賞ばむと爲る。王子答へして云ひたまふ。松葉を賞ばむと爲ふ。桃花は一旦の榮物にして、松葉は百年の貞木なりと。〕(傍線稿者)

両書とも、三歳の聖徳太子が松を好む理由を父橘豊日皇子(後の用明天皇)に問われて、桃花のように一時の榮えに終わらず、緑葉を百年保つ貞節の固さを認識して「松葉は百年の貞木なり」と即答した太子の聡敏さを讃えている。この言説は聖徳太子信仰に伴って喧伝されたようで、鎌倉時代初期の建長四年^三成立の『十訓抄』^{下十卷、才女を賞賜すべきに、}

たとへば、花のあたりの常盤木は、うち見るに、たとへなくさめたれども、春の日数暮れ、峰の嵐過ぎぬるのちに、緑ばかり残りて、飯の匂ひ、とどまらざるがごとし。されば、桃李は一旦の榮花なり、松樹は千年の貞木なりといへり。(傍線稿者)

と撰取され、室町時代永正九年^{二五}の『体源抄三』^{五段ノ下、日御上事}にもほぼ同文を引く。

たとへば花のあたりの常葉木はうちみるにすましくさめたれとも、春すき秋をくくりて後、みねのあらしにも木すゑちりぬる後は、みどりのいろふかき松柏のみみねにのこりて櫻桃のほひとまらさるかとし。されば桃李は一たむのゑいくわなり。松樹は千年の貞木なりといへることも侍にや。(傍線稿者)

ほかに『十訓抄』や建長六年^{五二}の『古今著聞集』に、次の記事もある。

そもそも、松を貞木といふことは、まさしく人のために、かの木の真心あるにあらず。雪霜のはげしきにも、色あらたまらず、いつとなく緑なれば、これを真心に比ぶるなり。〔十訓抄〕^{中第六ノ忠直を存すべき}

松樹を貞木といふことは、まさしく人のために、彼木の真心あるにあらず。霜雪のはげしきにも色をあらためず、いつもみどりなれば、これを真心にくらぶる也。

〔古今著聞集〕^{卷九ノ六十一「松樹を貞木と稱す事並びに」}昔道真実本府にして我が梅を詠む事^{昔道真実本府にして我が梅を詠む事並びに}両書共に冒頭から「松(松樹)」を貞木といふことは「貞木」が松の別称であることを承知していたと窺知される。

同時代後期の永仁四年^{九三}以前に成立した『宴曲抄』^{中竹にあらはし}「緑松は貞木の号有りて、霜の後に露る」と言い、安土桃山

時代の慶長二年一七五刊易林本『節用集』聚米に「貞木テイガク也」貞木也⁽¹²⁾とあることも、すでに「貞木」が松の異名で定着していたことの微証になろう。

なお、如上の「聖徳太子伝暦」などに言う「桃花一旦榮物、松葉百年之貞木也。」は、「桃花」を「樅花」に詠み替えた類句が『白氏文集』卷五三〇五に「松樹千年朽、樅花一日歌。〈松樹は千年にして朽ち、樅花は一日にして歌む。〉とあり、同卷十五五〇九にも「松樹千年終是朽、樅花一日自爲榮。〈松樹千年なるも終に是れ朽ち、樅花一日なるも自ら榮を爲す。〉と見られる。後者の卷十五は佳句で知られ、『和漢朗詠集』卷上、秋、二九一番、『夫木和歌抄』卷十一、秋部三、樅花、四五六、『源平盛衰記』智卷八、讃岐院事、貞などに受容された。

五 松は千年の貞

『海道記』の貞応二年三四月八日に、尾張国二村山の山越えを次のように記す。

山は何れも山なれども、優興はこの山に秀で、松は何れも松なれども、木立はこの松に作れり。(中略)松性松性、汝は千年の貞あれば、面替りせじ。

作者は山中の景趣に富む見事な松を「千年の貞」と喩えた。「千年の貞」は、前章の『十訓抄』などに言う「松樹は千年の貞木」と同義で、松が葉の緑を千年変えない節操の固

さを讃えて「千年の貞」と表現した。

六 松は人君、君子の徳を彰す

初唐の『芸文類聚』卷八十六、松に、松を「人君」に喩えた『夢書』を引き、次のように記す。

夢書曰、松爲人君。夢見松者、見人君也。⁽¹³⁾〈夢書に曰く、松を人君と爲す。夢に松を見るとは、人君を見るなり。〉

年中緑を保つ節操ある松の「人君」への擬人化は、『荀子』『淮南子』『礼記』などが「君子」に擬え、『白氏文集』卷二、諷諭三〇に次の如く「君子の心」と言い放つたのと類同である。

亭亭山上松、(中略)歳暮滿山雪、松色鬱青蒼。彼如君子心、秉操貫氷霜。〈亭亭たる山上の松、(中略)歳暮れて滿山に雪ふるも、松色鬱として青蒼。彼は君子の心の如く、操を秉りて氷霜を貫く。〉

わが国でも源順の「奉_レ同_二源澄才子河原院賦_一」に「君子」に喩えた長編の賦が、康平年間一〇六六に成立した『本朝文粹』卷二、賦に収録されている。

有院無隣、自隔羣塵。山吐嵐之漠漠、水含石之磷磷。丞相遺幽居、難忘前主。法王垂叡覽、猶感後人。其始也、軒騎聚門、綺羅照地。常有笙歌之曲、間以弋釣爲事。夜

登月殿、蘭路之清可嘲、晴望仙臺、蓬瀛之遠如至。是以四運雖轉、一賞無忒。春玩梅於孟陬、秋折藕於夷則。九夏三伏之暑月、竹含錯午之風、玄冬素雪之寒朝、松彰君子之德。暨乎有苦有樂一是一非、彼寬平之相府、爲天祿之禪扉。(傍線稿者)

院有りて隣無く、自らに罽塵を隔つ。山は嵐の漠漠たるを吐き、水は石の磷々たるを含む。丞相幽居を遣せる、前の主を忘れ難し。法王叡覽を垂れたまひ、猶後の人を感じしむ。其の始めに、軒騎門に聚ひ、綺羅地を照らす。常に笙歌の曲有りて、間ふるに弋釣を以ちて事となす。夜に月殿に登れば、蘭路の清きことも嘲るべく、晴に仙臺を望めば、蓬瀛の遠きことも至るが如し。是を以ちて四運轉ると雖も、一賞の忒ふことも無し。春は梅を孟陬に遊び、秋は藕を夷則に折る。九夏三伏の暑き月に、竹錯午の風を含み、玄冬素雪の寒き朝に、松君子の徳を彰す。苦有り樂有り一は一は非なるに暨びては、彼の寛平の相府も、天祿の禪扉となる。

京都の賀茂川の西に在った嵯峨天皇皇子源融の別荘河原院で、院の松樹を詠んだ賦である。傍線部「玄冬素雪の寒き朝に、松君子の徳を彰す」に、雪が降る冬の寒い朝に松樹が常緑を保ち続けるさまを、節操が固く高潔に生きる「君子の徳」に擬人化して讃えたのである。松が「君子の徳」に昇華

したのはわが国で従来見なかつた着想で、この佳句は『和漢朗詠集』卷下、松のほか、貞応二年成立の『海道記』四月五日鈴鹿山越えの紀行文にも「松は君子の徳をたれて天の如く覆へども」として受容される。

七 松の貞節と臣下の忠節

松は「人君」や「君子の徳」に擬人化されたが、松の貞節と忠臣を関連づける賦も『文選』魏都賦の句中に、「勁松彰於歲寒、貞臣見於國危。〈勁松は歳の寒きに彰れ、貞臣は國の危ふきに見る。〉」とある。この句は西晋の潘岳三〇八年が長安令に任じてかつて周朝の都だった地に赴いた時に、この地で紀元前七七一年に起きた申侯の乱で西周の幽王が烽火を上げて援軍を求めたが、これを軍兵が信用せず忠勤を尽さなかつたので西周が滅亡したことに思いを致し、嚴冬に緑色不変な松の貞節を抛り所にして、臣下の忠節も国家存亡の危機に遭った時に判るといふことを句にしたもの。

右の句はわが国でも、鎌倉時代初期の貞永二年以前成立の漢語章句抄録『明文抄』三に同文を「勁松彰於歲寒、貞臣見於國危」と引くほか、『十訓抄』中、第六十七段、松の貞節が、

そもそも、松を貞木といふことは、まさしく人のために、かの木の貞心あるにあらず。雪霜のはげしきにも、色あらたまらず、いつとなく緑なれば、これを貞心に比

ふるなり。「勁松は年の寒きにあらはれ、忠臣は国の危
きに見ゆ」と潘安仁が「西征の賦」に書ける、そのこ
ろなり。(傍線稿者)

と受容し、ほぼ同話を『古今著聞集』卷十九、六十七「松樹を貞木と稱する事、影にも、
菅原朝真、元宗府に侍てが宿の権を討事」にも、
松樹を貞木といふことは、まさしく人のために、彼木の
真心あるにはあらず。霜雪のはげしきにも色をあらため
ず、いつもみどりなれば、これを真心にくらぶる也。

「貞松は年のさむきにあらはれ、忠臣は国のあやふきにみ
ゆ」と、潘安仁が西征賦にかけ、此心なり。(傍線稿者)

と撰取した。また、鎌倉中期から南北朝頃までに成立した
『源平盛衰記』上巻、建隆第六、
源平盛衰、源氏少事は、如上の申侯の乱で西周が滅んだ

ことを引例して、

實に君の爲には忠勤あり、父の爲には孝道を存す、臣以
不_レ爲_レ臣不可_レ有_レ、子以_レ不_レ爲_レ子不可_レ有_レと宣へる
文宣王の言に不_レ相違_レぞありける。法皇聞召て、今に
不_レ始事_レと云ながら、怨をば恩を以て被_レ報ぬ、返々
も重盛が心の中こそはづかしけれ。勁松 彰_ニ於_レ歲
寒_一、貞見_レ臣_ニ於_レ國危_一と云へり、恥かしくも憑しくも
思_レ食_レ臣_也。(傍線稿者)

と記している。鎌倉時代に主従関係を伴う武家政権が成立す
ると、松の貞節の固さのように、臣下にも主君に対して生命
を抛つて尽す絶対的な忠義の心が殊のほか求められ、右傍線
部の警句が語り継がれたのであろう。

八 家にありたき松

『白氏文集』卷十五、
松樹に「白金換得青松樹、君既先栽我不
栽。へ白金もて換へ得たり青松樹、君は既に先づ栽えたれ
ば我は栽えず。」の詩句が見られる。元宗簡が白居易の住ま
いの西隣に新居を構えて、その庭先に銀貨を費やして購入し
た松を植えたことから、白居易は自宅の庭に松を植える必要
がなくなつたと言っている。古代の中国で松は高額であつた
ようだが、購入して庭先に植栽するほどの尊い樹木であつた
ことが窺われる。

わが国では、天平十六年七四四正月五日の安倍虫麻呂朝臣宅
の宴會に、虫麻呂宅に松が植えてあつたことが『万葉集』
卷六、雜歌一〇、
四六、作歌不審の「我がやどの君松の木に降る雪の行きには
行かじ待ちにし待たむ」から知られる。同じく『万葉集』
卷十二、古今出往來、
歌類之上、四八四、四「君来ずは形見にせむと我が二人植えし松の木
君を待ち出でむ」は、芽生えた恋の成就を期して、松を形見
として女の家に男女で植樹したことが歌われている。

松は平安朝の貴族たちにも愛好されて第宅に植栽された。
例えば、あて宮がある寝殿の前栽の所や(『宇津保物語』
の藤原、
藤原)、常陸宮の姫君末摘花が住む荒れた邸宅の中門付近に小
高い松の木があつた(『源氏物語』花未摘、
花生)。また『後撰
集』卷十五、雜一、
〇七、凡河内野では、

淡路のまつりごと人の任果てて上りまうで来ての

頃、兼輔朝臣の栗田の家にて

引きて植ゑし人はむべこそ老にけれ松のこだかく成にける哉^⑧

と躬恒がかつて藤原兼輔粟田邸に植えた小松が高木に成長したことに感慨を漏らしている。

邸宅に植える松の多くは、正月初子の日に長寿を願つて他所で根曳きにした小松が移植された。宮内卿兼覧が右大将仲忠京極邸の庭を朱雀院に案内した時の『宇津保物語』^{上巻}に、

宮内卿、年七十なる「あはれ、むかしを思ひ出ではべれば、あの岩のもとの松の木は、かの山に侍りしを、子の日におはしまして、引き植ゑはべりしぞかし」と奏したまふ。七、八樹ばかりして、上に平みたる松を見やりて、宮内卿兼覧、

引き植ゑし子の日の松も老いにけり千世の末にもあひ見つるかな

とある高木の松樹は、かつて嵯峨の院が正月子の日に築山で根曳きにした小松を、岩の下に植え替えたものであった。こうした正月子の日の小松を邸第に移植するさまは、屏風歌の画題に好まれた。例えば、延長七年^{九二〇}に中納言保忠四十賀を弟の左兵衛佐敦忠が催した屏風歌には、「子日松いへにうゑたるところ」^⑨（『伊勢』一八四詞書）の景が詠まれた。

左大臣藤原道長の土御門第には南池の北のほとりに松樹があった。『御堂関白記』寛弘五年^{一〇六〇}十月十六日条に、一条天

皇が行幸して船樂が催され、樂船が池の南山の間から出て御前を数廻したのを、「池北頭松樹下留船、奏樂各二曲。」^⑩と記して北の頭の松樹の下に船を留め、樂各二曲を奏す。」と記している。樂船を松樹の下に停船させたのは道長の趣向と推知されるが、千歳の松を背景にして樂曲で幾久しい慶びを予祝したのである。

鎌倉時代末期、元弘元年^{三三}頃成立の『徒然草』第一三九段には、「家にありたき木は、松・桜。松は五葉もよし。」と言ひ、家に植えておきたい木の筆頭に「松」を挙げるほど尊ばれた。しかし、江戸時代の貞享五年^{六六}刊『日本永代蔵』^{巻二、二代目}では、「人の家にありたきは梅・桜・松・楓、それよりは金銀米錢ぞかし」^⑪と言ひ、町人には上記『徒然草』の主張を覆して、実利的なものに生きがいを求める生活指向が垣間見られるようになる。

九 五葉松

邸宅の松には五葉松が好まれた。紀伊國藤井の宮の広大な池の上に建つ檜皮葺の御殿三棟の周囲は、五葉松で囲まれていた（『宇津保物語』^{上巻}）。仲忠京極邸には築山の高所から落ちる滝の下に趣のある五葉の小松があった（『宇津保物語』^{下巻}）。紫の上が住む六条院の東南町にも五葉松を植えていた（『源氏物語』^{女少}）。五葉松は屏風歌の画題にもなった。『元輔

Ⅰ「二五七番の月次屏風歌「ちとせふるまつといふともうゑてみるひとにかすゑてしるへかりける」の詞書に「正月、こえふあるところ」とあるのはその一例である。

前章に引いた『徒然草』第一三九段に「家にありたき木は、松・桜。松は五葉もよし。」とある如く「五葉松」は、家に植えたい樹木の中でもその名が特記される別格な樹木であった。また五葉松は、『枕草子』第三八段に「木の花ならぬは、楓、桂、五葉」と言う如く、葉を愛でる樹木であった。『宇津保物語』^{の隠}に「長月になりぬ。風涼しくなり、虫の声、御前の草木も整ひて、木の葉は色づき、草むらの花咲き、五葉の松はのどけきをまし、色々の紅葉、薄き濃き、村濃に交じり、月おもしろき夕暮れに」とある晩秋九月の左大将源正頼三条邸庭前の五葉松も、緑松が一段と色を深めたところへの着眼である。『源氏物語』^河の「かの御方の御前近く見やらるる五葉に藤のいとおもしろく咲きかかりたるを、水のほとりの石に苔を蒔にてながめあたまへり」も、冷泉院に嫁いだ大君への未練を引きずる薫が、大君の居所近くの松を見やり、それが「五葉」であるのを認識した一齣である。

右のように「五葉松」を愛好したのは、長寿や繁栄を象徴する松の中でも、枝の鱗片葉から出る短枝の頂部に文字通り「五葉」の針葉を束生することから、多幸を印象づける緑起の良い樹木とされたことによる。それ故に『宇津保物語』

^七欄で朱雀帝女一宮の女兒宮誕生九夜産養に、女一宮の母仁寿殿女御が祝儀の品々を「五葉」に付けて朱雀帝に進上したのも、女兒宮の行く末を縁起の良い「五葉松」にあやかる儀礼である。また『落窪物語』^{三卷}の「青き瑠璃の壺に、黄金の桶入れて、青き袋に入れて五葉の枝につけたり」も落窪の女君の父中納言の七十賀法華八講五卷日に、欠席する右大臣が仏前に捧げる品に「五葉」の折枝を結び付けたのも、「五葉松」に因む長命や多幸への祝意的配慮からであった。

一〇 池辺や泉と松

貴族の第宅の池辺や泉には、松がなくてはならない樹木であった。そのため池辺や泉近くの松は、とりわけ和歌に多く詠まれた。次の歌はその一例である。

右大臣、家造り改めて渡りはじめける頃、文作り、歌など人く々に詠ませ侍けるに、水樹多三佳趣」と

いふ趣を
すみそむる末の心の見ゆる哉汀の松の影を映せば²⁰

〔拾遺集〕^{卷十六 雜賀(一)}
七五、藤原公任

長保元年^{九九}五月七日、左大臣藤原道長第作文会に右衛門督藤原公任が「水樹多佳趣」の同題で詩を詠んでいるので〔御堂闕白記〕、「本朝麗藻」^{夏上}、右の詞書「右大臣」が「左大臣」の誤記ならば、この作文会に因んだ歌になるう。

詠歌の年時はさておき、澄んだ池水に汀の松が緑の影を映すことに着目して、家屋を改築した家主の末長い繁栄を寿いだのである。このように池の水面や水底に映る松の緑色や姿は、家主の長寿や繁栄を象徴すると見られていたので、第宅の池辺に松を好んで植えたのである。このため池辺の松は、河原院歌合に松臨池といへる事を

たれにかと池の心も思ふらん底に宿れる松のちとせを⁽²⁾

(三奏本『金葉集』第五頁、三一四惠慶法師)

鳥羽殿をはじめてわたらせ給うて、池辺松といふことを講ぜられしとき、序たてまつりて

いはひおくはじめとけふを松がえのちとせのかげにすめる池水

いろかへぬときはの松のかけそへて千世に八千世にすめるいけみづ

(続後撰集)卷二十頁歌一三三、前太政大臣(三)

など賀歌に頗る多く見られる。右の『金葉集』三一四歌もその一例で、応和二年^{九六}九月五日庚申の夜に催した歌合での詠で、河原院には安法法師が住んでいた。池辺の緑松が水底に影を宿すのを抛り所にして、院主安法法師の長命を寿いだのである。

また、松と泉を配合して賀意を表わす画題の屏風歌も枚挙に遑がない。

延喜御時、御屏風に

松をのみときはと思に世と共に流す泉も緑なりけり

(『拾遺集』一卷五頁、二九紀貫之)

賀屏風、人の家に、松のもとより泉出でたり

松の根に出づる泉の水なれば同じき物を絶えじとぞ思

(『拾遺集』卷十八頁、一一六四紀貫之)

『拾遺集』二九一歌は、西本願寺本『貫之集』二六五詞書によれば、延喜十八年^{八九}に醍醐天皇の承香殿女御源和子を寿いだ屏風歌。画題に「川のほとりの松」(正保版本『貫之集』一一八詞書)、「河辺の青柳松」(西本願寺本『貫之集』二七〇詞書)とあり、川辺の松が絶え間なく湧き出る泉に緑色を映すことのためたさにあやかつて女御の長寿を予祝した。『拾遺集』一一六四歌は、同一歌の西本願寺本『貫之集』三二五詞書によると、延長四年^{九三}八月二十四日権中納言藤原恒佐室が、父の大納言藤原清貫六十賀を催した屏風歌で、松の根元から無尽に湧く泉も常緑不変の緑であることに寄せて清貫の長寿繁栄を祝った。

一一 門松について

長命で常緑の松は、神格化され神霊が宿ると考えられた。

中国最古の王朝夏^{前二六〇〇年頃}では、社の神木が松だった。社は、土地の神を祀る所で、依代の神木を植えて来臨する神霊を迎えた。孔子門弟の宰我は、夏の社木が松であることを

『論語』第八份で語っている。

哀公問社於宰我。宰我对曰、夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗。〔哀公社を宰我に問ふ。宰我对へて曰く、夏后氏は松を以てし、殷人は柏を以てし、周人は栗を以てす。〕

夏王朝が社の神木に松を植えて信仰したことから、神の来臨が松を依代にする着想は、日本で新年正月に開運招福を掌る歳徳神が、清浄な家の目印である門松に降臨すると言われる俗信に相通じるものである。

『本朝無題詩』卷五、雑部、三六一「長篇」之間以詩代書皇太子 に入集する惟宗孝言一〇三四、一〇九六年の七言詩に、

正月春中閉四墻。(中略) 鎖門賢木換貞松。近來世俗皆以松種門云。而余以賢木換之故に云ふなり。

とある句の自注によれば、平安時代中期の門松は、門を閉じて松の枝を門戸に挿むのが近來の風習とあるが、孝言宅では賢木を用いたと言う。

「門松」の語の初見は、左掲の平安末期長治二年一〇五二頃の『堀河百首』冬十五首、除夜一、一〇九の歌である。その後、太皇太后宮藤原多子二四〇、二六〇に仕え晩年に後鳥羽院二二八、二二九の歌壇にも連なった歌人の『太皇太后宮小侍從集』卷七、一、嘉応元年六九二頃の後白河法皇撰の歌謡集『梁塵秘抄』卷一、今様二六、五頁、春二二、慈円二二五、二二五の家集『拾玉集』冬三、百首四六、冬三、二六八、二六八、建仁二年一一二二の後鳥羽上皇の『千五百番歌合』冬三、千四百番迄、冬三、九二、寛元二年一一四二の『新撰和歌六帖』日四、藤原保美

などに順次見出される。

門松をいとなみたつるそのほどに春明がたに夜や成りぬらむ(『堀河百首』)

うらみむもいつしかなれば明日よりはいはでやかどの松とみえまし(『太皇太后宮小侍從集』)

新年春来れば門に松こそ立てりけれ松は祝ひのものなれば君が命ぞ長からん(『梁塵秘抄』)

としく来て冬ふかければ雪もふかししづが門松きりやわぶらむ(『拾玉集』)

あすをまつしづがかどまつさきたててけふより春の色をみるかな(『千五百番歌合』)

けさはみなしづが門まつたてなめていはふことぐさいやめづらなり(『新撰和歌六帖』)

右『拾玉集』『千五百番歌合』『新撰和歌六帖』の「しづが門松」、そして次に挙げる『新勅撰集』卷七、賀歌、四六、前関白藤原道家の寛喜元年一一三二十一月十六日に関白藤原道家長女樽子(のちの藻壁門院)が後堀河天皇女御として入内した時(『帝王編年記』)の

屏風歌第四句「民の戸」や、文保二年一一三二の『文保百首』藤原和歌、冬十五首、法印定長上第二句「民の門松」などにより、鎌倉時代に至ると庶民の間にも門松を立る習俗が広く普及したことが看取される。

はつはるの花のみやかに松をうゑて民の戸とめるちよぞしらるる(『新勅撰集』)

いはふべき民の門松になひもていそぐにみゆる年のくれ
かな〔文保百首〕

こうして都では貴賤を問わず縁起物の門松を戸毎に立てて
新年を晴やかな気持で迎えようとしたのであり、そのさまは
次の事例からも窺知されるのである。

大路のさま、松立てわたしてはなやかにうれしげなるこ
そ、またあはれなれ〔徒然草〕第九十
帰り来る都の人の家くくに年を迎へて松立てる門②

〔竹林抄〕三卷、春遊歌、
権大僧都心歌

室町時代に至ると一条兼良一四〇三年の『世諺問答』正月に、

「門の松たつる事は、むかしよりありきたれる事なるべし。

〔中略〕その門の前に松竹を立侍り。松は千とせをちぎり、

竹はよろづ代をちぎる草木なれば、としのはじめの祝事にた

て侍るべし。」②とあり、室町後期には松に竹を組合わせた門

松が主流になったようである。

付記 拙稿「古代中国における松」②も参照願えれば幸いであ
る。

注

(1) 『秘蔵抄』〔統群書類従〕第十六輯下、統群書類従完成会、

昭和48年。

(2) 木村正中『土佐日記 貫之集』新潮日本古典集成、新潮

社、平成9年。

(3) 「類聚句題抄」〔統群書類従〕第十二輯上、統群書類従完成
会、昭和32年。欠字の「伴」は、『日本詩紀』巻之二十六
収載の同詩で稿者が補う。

(4) 孫楚の貞節の高さを具体的に示す典故は見出せない。西晋
の孫楚は『晋書』卷五六・列伝第二六・孫楚に、「楚少時
欲隠居、謂濟曰、当云欲枕石漱流、誤云漱石枕
流。濟曰、流非可枕、石非可漱。楚曰、所以枕流、
欲洗其耳。所以漱石、欲厲其齒。」とある負け惜し
みの故事で知られる人。詭弁を弄して己の誤りをも正しい
と言いつつした「漱石枕流」の故事に因んで、孫楚の信念を
曲げないその堅さを貞節の人に喩えたと見られなくもない
が、『懷風藻』一二の尾聯に「隠居」とあるほか、上記『晋
書』に「初め楚少時、隠居せんと欲し」と言うので、本
稿では、孫楚が若年の時から世俗を離れて隠居を強く望み
続け、冠ならぬ笠を被って隠居の身の軽さに満足した姿勢
を、孤松の如き貞節の高さに擬えて「孫楚高貞節」と詠じ
たと解しておきたい。

(5) 石川核『源平盛衰記 下』有朋堂文庫、有朋堂書店、昭和
2年。

(6) 沈約撰『宋書』第七冊、中華書局、一九七四年。

(7) 范曄撰『後漢書』第三冊、中華書局、一九六五年。

(8) 『聖徳太子伝暦』〔統群書類従〕第八輯上、統群書類従完成
会、昭和50年。

(9) 『扶桑略記 帝王編年記』新訂増補国史大系、吉川弘文館、
昭和17年。

- (10) 正宗敦夫『体源鈔 三』日本古典全集刊行会、昭和8年。
『宴曲抄』（『続群書類従』第十九輯下、続群書類従完成会、昭和49年）。
- (11) 正宗敦夫『節用集 易林本』日本古典全集、日本古典全集刊行会、昭和4年。
- (12) 『芸文類聚（卷八十八）訓読付索引』大東文化大学東洋研究所、平成27年。
- (13) 『明文抄』（『続群書類従』第三十輯下、続群書類従完成会、昭和51年）。
- (14) 石川核『源平盛衰記 上』有朋堂文庫、有朋堂書店、昭和2年。
- (15) 片桐洋一『後撰和歌集』新日本古典文学大系、岩波書店、平成2年。
- (16) 『私家集大成』中古Ⅰ、明治書院、昭和48年。
- (17) 『御堂閑白記 上』大日本古記録、岩波書店、昭和52年。
- (18) 『私家集大成』中古Ⅰ、明治書院、昭和48年。
- (19) 小町谷照彦『拾遺和歌集』新日本古典文学大系、岩波書店、平成2年。以下、『拾遺集』は同書による。
- (20) 川村晃生・柏木由夫・工藤重矩『金葉和歌集 詞花和歌集』新日本古典文学大系、岩波書店、平成1年。
- (21) 『私家集大成』中古Ⅰ、明治書院、昭和48年。
- (22) 久曾神昇『西本願寺本三十六人集精成』風間書房、昭和41年。
- (23) 『本朝無題詩』（『群書類従』第九輯、続群書類従完成会、昭和46年）。
- (24) 島津忠夫・乾安代・鶴崎裕雄・寺島樵一・光田和伸『竹林抄』新日本古典文学大系、岩波書店、平成3年。
- (25) 『世諺問答』（『群書類従』第二十八輯、続群書類従完成会、平成5年）。
- (26) 拙稿「古代中国における松」（『東洋研究』第二三四号、大東文化大学東洋研究所、令和6年12月）。